



「今だけ“本を読みましよう!”
若い時に読んだ本が人生の武器になる

大宮エリー



JALスカイミュージアムでの展覧会の新作100枚の空を描き上げ、取材中に談笑。
あの空何に見える?

香り高い文学作品は 10行だけ、深くかじればOK

大人になってから本はほとんど読んでいません。いつか時間ができたら読みたい本はたくさんあるのですが、本棚にどんどん溜まっていく一方…。

昔はよく読んでいました。特に小中高の学生時代は本の虫で。もともといじめられっ子で友達も少なかったのに、本の世界に逃げ込んでいたんです。



会社員時代の20代。海外旅行中イギリスの郊外の海辺で。

哲学的なファンタジーが大好きで、中でもミヒヤエル・エンデの『はてしない物語』には人生の真髄がある気がします。少年が本を読んでいるんだけど、あちらの世界が話しかけてきて、最初はびっくり、信じないのだけれど、自分がどうやら本の中身の主人公になっているのを認めるんです。そこから人生が動き出す。ほら、人生もそう。みんな主人公、自分の人生というストーリーの。児童文学だけ読んでりゃいいんじゃないかと思うんです。短いし、ためになる。生き抜くヒントがたくさん。人として大切なことも。『大どろぼうホッツェンプロッツ』や灰谷健次郎の『兎の眼』、『我利馬の船出』も好きでした。中学生の頃、なぜか五木寛之の『野火子』、しかも古本！が道端に落ちていて、これ、必然？と思って読みました。コンプレックスを抱えた女の子が、貧しい炭鉱の町から自分の名前を捨て、野火子って名のり上京し、自分を取り戻しまた故郷に戻る話だった気が。なんかかっこよかった。

大学受験の際に、大学の過去問も私の

思いを伝えるということ展(2012)
「心の箱」「孤独の電話ボックス」「立ちほだかるドア」
「あの日見た夕日」など8作品。



貴重な読書経験(笑)。出典が小林秀雄や泉鏡花などの名著。難しすぎて、さすが入試問題ですが、ある先生に「小林秀雄おじさんは何を言おうとしている?と膝を突き合わせて話を聞くように読んでみて」とアドバイスをいただいた。途端にすらすらと読めるように。小難しい

言い回しもその人の個性と気づいてから、文体に香りのようなものを感じたんです。私がいま作家をできているのもその時の経験から。いろんな文豪の文体を味わった。でも、どの本も出題として読んだだけなので、10行しか知らない!(笑)。夏目漱石の『二二ころ』も、結局Kはどうなった?(笑)。

本から学ぶことは全てに生きる
若い時に読む本は、
人間の奥行きになる

現代美術の世界にはいり10年。初めて渋谷パルコで展覧会を開催したとき、詩の展示とそれにまつわるアートの展示をしました。体験型のインスタレーションで、心の箱、という「孤独」とか「虚しさ」とか「嫉妬」とかそういう箱に手をつっこんで、心に触れる「こわさを体験してもらったり。中身が見えないから怖い、心って見えないから怖い。でも、じつは、見えちゃえば意外とシンプル、触られてる心は少し楽しそうに見えるっていうのを表現したり。大き



思いを伝える ということ

大宮エリー
文春文庫
638円(税込)

思いつてなんだろう、伝えるってなんだろう、伝えられないってどうしたらいいんだろう。そんなとき読んでもらえたら。そう考えればいいのか！嫌いだった自分が好きになった！自分を責めなくなった！愛せるようになった！などなど、あなたに寄り添いたいと思って書いた本。(大宮)

文春文庫編集部より



文庫化に際し、大宮さんが書き下ろしレベルに全面改稿されました。少し疲れたなという日、ひたむきで切実なむきだしの言葉をぜひ浴びてみてください。

なドアが立ちほだかりそれを開けなくては次にいけないとか。人生にはそういう局面がありますよね、それを体験する。舞台装置なんです、役者さんではなく展覧会の来場者それぞれが主人公。つまり、本と同じ。会場内を読み進めるさまは、本の中を歩いていくよう。まるで子どもの頃に読んだ『はてしない物語』だったのです。

本には、行と行の間に時空を超えた

果てしない世界が隠れています。この非日常を体験することで、心のひだが深まり、人間的にも豊かになっていくのではないのでしょうか。量より質。速読ではなく、遅読でOK。10行でいい。言葉を知的に操る大人になるためにも、文体から香りを感じて身につけて。

作家 画家 大宮エリー ↓ 『遺書 p.32-33』